

繊維産業の発展が生んだ工業景観

— 鋸屋根工場群 —

■「鋸屋根」とは

現在「BISHU」（尾州）ブランドで知られる愛知県尾張西部から岐阜県南西部、知多北部の東浦町周辺、東三河南部の蒲郡市など、繊維産業が発達した地域には、「鋸屋根」の建物群が残存する。

建物上部が「のこぎりの刃」に似た「鋸屋根」の建物は、機械を置いたり、作業をするための「工場」として建築された。特長は「鋸屋根」短辺部に付いた大きな採光用の窓で、外光が建物内部に行き渡る。明るい環境下の作業を可能としたため、繊維関係の工場で広く用いられた。なかでも、一宮市の鋸屋根工場群は群を抜く規模で、2008-2010年の調査では北部だけで2千2百棟を越す工場の現存が確認された。



写真1：木造2連の織布工場（一宮市）岩井章真撮影（2023年）

■鋸屋根工場の用途



写真2（上）：写真1の工場内部 岩井章真撮影（2023年）

写真3（下）：ニット業等で使用された工場内部

伊藤紫氏撮影（2023年）

鋸屋根工場の用途は、複数の力織機や製織準備機を備えた織布工場（写真1・2）が知られるが、それに限定されるものではない。蒲郡市では、繊維関係の工場に限っても、織布を中心にロープ、製紐、縫製、整経、染色整理などの工場で採用されていた。

最近（2023年8月）調査した一宮市西部のある小工場（写真3）は、当初1連の織布工場として建てられるも、経編機（ラッセル機）を設置したニット工場に転換され、転換時に下屋が増築された。ニット業廃業後は糸の巻き返しを行うワインダー工場となり、その後工場としての役割を終えた。鋸屋根工場は、生産に必要な面積に応じて簡便に増築され、独立柱の少ない内部空間は所有者の意向で次々とレイアウトを変えた。

■消えゆく工場、稼働する工場、活用される工場

長年続く繊維産業の構造不況は、産地の数多くの工場群が賑やかに稼働する風景を消し去った。かつては当たり前に関こえた、鋸屋根工場から響く「ジョンヘル」と称される有籽織機の稼働音は、いつしか珍しいものになった。老朽化した工場は次々と取り壊され、織物生産を支えた工業景観は失われつつある。

一方で、生産を続ける工場もまだ残っている。葛利毛織工業株



写真4：葛利毛織工業の織布工場（木造4連）

と関連建物群（一宮市）岩井章真撮影（2019年）

株式会社（一宮市木曾川町玉ノ井）の建物群は2021年に国登録有形文化財に登録され、「文化財」となった工場でも織物などの生産が続けられる。また採光性などの特性を活かし、旧工場をカフェやギャラリーなど工場以外の用途に活用する動きも少しずつ広がってきた。

一宮市では鋸屋根工場の建築が確実視される大正初期から100年以上が経過した。歴史性を帯びた「鋸屋根」の工場群の実態とこれからについて、関心を持って追っていきたい。

（岩井章真）